

特別賞 紀伊國屋書店賞

『たとへば君 四十年の恋歌』 河野裕子, 永田和宏著

文学部 文学科 2年 宮本若奈

「たとへば君 ガサッと落葉すくふやうに私をさらつて行つてはくれぬか」¹

歌人、河野裕子さんの一首である。大学時代、後に夫となる永田和宏さんに出会い、惹かれていく一方で、もう一人の思い人との間に揺れる恋心に悩み、詠んだ歌である。この本の中で、河野さん自身が、この歌について何か語っている記述はない。しかし、こうした文脈を踏まえて読むと、たったの三十一文字から、不思議なほどしっかりと、二つの気持ちに板挟みになって悩み苦しむ、河野さんの心情がリアルに伝わってくるのである。

この本は、歌人の夫婦、河野裕子さんと永田和宏さんの間で交わされた歌とその背景を綴ったいくつかの文章から構成されている。二人の出会いから、結婚、日々の暮らし、子育て、そして河野さんの病による永遠の別れまで、夫婦が共に過ごした四十年がぎゅっと詰まった一冊である。

この作品を読んで特に印象に残るのは、やはり河野さんが乳がんを発病してから亡くなるまでの、十年の間に詠んだ幾首もの歌だろう。それまでの、日常のちょっとしたことを詠んだ歌とはまた違って、死を意識した歌が多くなっている。たとえば、この一首だ。

「この家に君との時間はどれくらゐ残つてゐるか梁よ答へよ」²

河野さんは、死への恐怖よりも、家族と共に過ごせる時間が残りわずかとなってしまった悲しみを、折に触れて歌に詠んでいる。病が発覚したときや、体が苦しくなった時だけではなく、普段の暮らしのふとした瞬間に、残された時間、自分がいなくなった後の家族を思い、歌を詠むのである。その瞬間は、誰にとっても決して特別なものではなく、だからこそ、河野さんの思いが深々と読者の胸に突き刺さってくるのだ。私自身もこの本を読んで、自分の周りにいる家族、恋人、友人について考えるようになった。今はその存在が当たり前のように思えるが、別れはいつか必ず訪れる。その時に、ああしておけば、と後悔ばかりすることがないように、今の関係と、共に過ごす時間を大切にしようと思えた。河野さんの歌は、現在の自分とその周りの大切な人との関係を、見つめ直すきっかけを与えてくれたのだ。

私は今まで、短歌に触れたことがあまりなかった。しかし、この本に出会って、短歌の魅力に少し気づくことができたのではないかと思う。時として、短歌は一編の文章よりよほど雄弁に、詠み人の喜びや悲しみ、希望や絶望、そして人を愛しく思う気持ちを伝えてくれるものである。思うほど短歌は難しいものではない。興味がないという人も、まずはこの一冊を手にとって、短歌の素晴らしさを感じてみて欲しい。

¹ 本文 p 31 より

² 本文 p 227 より